



わたしの聖戦

女性が働くことについて
医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

177

プラシーボ効果の可能性

プラシーボという言葉
を聞いたことがあるだろ
うか。一般に、偽薬（ぎ
やく）と訳されることが
多い。

質の変化や神経回路の研
究の一環としてもプラシ
ーボ効果は実に面白い研
究対象となっている。

これまで多くの研究
が行われてきたが、結果
の概要は以下の通りだ。

何がしかの効用を持つ
薬剤を投与すれば、症状
が改善したり楽になった
りするのは当然だが、
「これは効きますよ」の
言葉とともに偽の薬を飲
ませても、本物の薬と同
じように効果を発揮する
ことがある。これがプラ
シーボ効果。偽の薬は、
いかにも薬のような形態
をしているものの、中身
はどうもろこしの粉や砂
糖を薄めたもの、効力は
ないはずだ。

ちょうど、脳科学のブ
ームと相まって、脳内物

本物の薬の効果を10
0とすると、偽薬は70
80%前後の効果を著す。
内服薬より点滴のほうが、
錠剤よりカプセル型が、
小さめのカプセルより大
きいカプセルが、より効
く。また、カプセルの色
が赤いのは痛みの緩和に
威力を発し、青いカプセ
ルは鎮静効果に優れてい
る。さらに、価格の安い
薬剤より高い薬剤のほう
が、本物と同じ実感を得
られるらしい。

最近では、飲み薬だけで
はなく、本当に手術をし
た場合と手術をするふり
をした場合でも、痛みや
症状の改善に大きな差が
なかったという結果も出
ている。

脊椎を骨折した患者を
ランダムに振り分け、一



方にはセメントを注入す
る本物の手術を行う。も
う一方のグループには手
術室で局所麻酔をかけ、
これからセメントを入れ
ます、と説明するところ
までは同じ。しかし、こ
ちらはポーズだけでセメ
ントは注入しない。それ

でもプラシーボ効果によ
って患者が「治る」ケー
スがある。

しかし、この種の実験
には後ろめたさがつきま
とう。何せ、患者にウソ
をつかねばならないのだ
から。薬ではないものを
薬だと説明されれば、患
者はその言葉を信頼
し、暗示や思い込み
などがバイアスとな
り、本当に効いたよ
うに勘違いしてしま
うだろう。

そこで、患者にウ
ソは言わない、つま
り、最初にこれは偽
の薬だと事実を知ら
せたらどうなるか、
という実験も行われ
た。その際、偽だけ
れど、あなたのため
に治癒力に薬になるかもし
れませんが、と一言付け加
えておく。すると、偽薬
と知っていても、つらい
症状がほとんど消えてし
まったというケースが認
められたのだ。いったい、
これはどういうことだろ
うか。

どうやら、患者の「治
りたい」という強い気持
ちや未来への期待感が、
本来、薬や手術によって
分泌されるはずの脳内物
質の活性化を促し、病氣
の治癒につながる可能性
があるのだという。しか
し、まだまだわからない
ことが多く、しばらくは
様々な実験が世界中で繰
り広げられることだろう。
ただ、はつきり言える
のは、薬にしろ手術にし
ろ、患者と医療スタッフ
のコミュニケーションが
良好でないとその効果は
半減するだろうし、関係
が良好なら何でもそこそ
この効果が得られるとい
うことだ。

プラシーボの語源はラ
テン語で、「私は喜ば
す」という意味である。
プラシーボとは、次々
と開発される薬や最新の
技術に心奪われて、目の
前の患者の気持ちに察す
ることを忘れてしまいが
ちな医療者たちへの、熱
い警告なのかもしれない。
イラスト・伊藤栄章